

A 火口は火口内壁の一部崩落により、火口南側に噴気地帯が形成されたため、火山ガス観測が可能となった。噴気温度はA火口で500℃以上、B噴気地帯で400℃以上であり、熱活動のレベルは高い状態であった。

山麓の錦多峰川源流および温泉沢の水質に大きな変化はみられなかった。

8. 5. 3 駒ヶ岳

(担当)：岡崎紀俊・荻野 激・田村 慎・柴田智郎

駒ヶ岳の現地観測は、山頂火口原での火口温度観測、山麓での水質および地下水位観測を実施した。また、南山腹～山麓にかけてのGPS連続観測点3点の保守・点検も実施した。

昭和4年火口および96南火口列では、全体として噴気が非常に少ない状態が続いており、熱活動に大きな変化はみられなかった。また、山麓の駒の湯、トドメキ温泉、留の湯の水質に大きな変化はみられなかった。

8. 5. 4 十勝岳

(担当)：岡崎紀俊・柴田智郎・村山泰司・荻野 激・廣瀬 亘・田村 慎

十勝岳の現地観測は62-0、62-I火口周辺での地温連続観測、62-II火口での温度観測、大正火口での火山ガス採取、山麓温泉・湧水の水質観測および地下水位観測を実施した。また、前十勝および十勝岳中腹におけるGPS連続観測点2点の保守・点検も実施した。

また、GPS連続観測による基線解析結果では顕著な地殻変動は観測されず、山麓温泉・湧水の水質にも大きな変化は見られなかった。

8. 5. 5 雌阿寒岳

(担当)：岡崎紀俊・廣瀬 亘・石丸 聡・田近 淳・村山泰司・柴田智郎・田村 慎

2006年3月21日の小噴火は、有史以来噴火活動の中心であったポンマチネシリ火口南縁の火口列(96-1火口など)からではなく、その北西側の赤沼火口および北西斜面の2ヶ所からであったこと、および北西斜面に新たな地熱地帯を形成したことが大きな特徴であった。小噴火後、北海道大学および札幌管区気象台等とともに各種調査を実施した結果は以下のとおりである。

- 1) 火山灰にはマグマの関与を示すような新鮮な火山ガラスや発泡したマグマ片は認められなかった。
- 2) 山麓部および山頂部における噴出物の総量は約9,000tと推定された。
- 3) 赤沼火口06火口群および北西斜面06噴気孔列で観測される噴気温度は100℃程度と低い。
- 4) 雌阿寒温泉(野中温泉)の泉質は小噴火後わずかな変化が観測され、地下での一時的なCa-Cl型熱水の混合比変動が原因と推定される。
- 5) 山頂部でのGPS連続観測の結果、地震多発期に対応する前兆的な地殻変動はなく、噴火時に5cm程度の変動が観測された。

これらの結果および山麓では小噴火に関連した地殻変動が観測されなかったことから、2006年小噴火は地下のマグマの移動ではなく、ガス主体の地熱流体の移動によって発生したと推定される。さらに、小噴火後に実施したGPS繰返し観測により、ポンマチネシリ火口周辺の観測点では、2005年9月に比べて数cmの地殻変動が観測された。これらの変動は、噴火によって赤沼火口06火口群および北西斜面06噴気孔列それぞれで、割目(亀裂)が20～30cm程度開口したモデルでおおよそ説明される。

現在、96-1火口で観測される噴気温度は200℃以下であり、噴火前よりも100℃程度低い状態が続いている。赤沼火口06火口群および北西斜面06噴気孔列からの活発な噴気活動は継続しているものの、火山活動は比較的安定した状態が続いている。